マタイによる福音書 20 章 20-28 節
「何が望みか」

今日の聖書個所は、マタイ独自の視点がよく現れている聖書箇所です。兄弟の母の訴えに、主イエスがどう対応されたか、が見事に伝えらえているからです。「何が願いか」と。今日の問題点は何か。それは、22 節「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない」、このことに尽きると思うのです。イエスさまは母親の願いに、しっかりと耳を傾けている姿です。次に今度は当事者（兄弟）にも、それが本当かどうか、確認しています。「わたしが飲もうとしている杯を飲めるか」。そしてさらに自分たちの方向性を、示しています。「あなた方の中で偉くなりたいものは、皆に仕える者になり、一番上になりたい者は、皆の僕になりなさい」。

そしてさらに、ここでもう一つの問題が生じたのでした。それは、イエスさまの弟子集団の地位争い、という問題です。競争心とねたみが支配したのです。私たちの生活の中で色々な覇権争いがあり、上に立ち力を持つ者が偉いものであり、価値のあることということが当然の価値として私たちに植えつけられています。しかし、イエスさまは、ここで全く反対のことを言われます。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」（27 節）。「仕える者」は奉仕者とも訳されるし、ルカ福音書では「給仕する者」、すなわち食事を整える者の意味で使われています。「僕」とは直訳すれば「奴隷」です。イエスさまはそれを文字通りひっくり返された。「仕える者になりなさい」と。我先にと私腹を肥やすのではなく、先頭に立って他者の食事を用意する人になりなさい、と。他者のために命を注ぎ出す生き方です。誰が偉いか権力争いをしている間は、とげとげしい空気が流れます。弟子達の間にもそのような空気が流れたことでしょう。しかし、主イエスは命を捧げて、お互いが尊敬し高め合う世界を広げていかれました。「何が望みか」と問われたイエスさまの意図は、ここにありました。大きな目標を持たずして、あなたはなぜ偉くなりたいのか。それよりも、より大きな目標のために、仕える道を歩んでいってほしい、今到達できなくても、次世代に引き継いで、一つになるということを目指してほしい。そのようにイエスさまは願われたのだと思うのです。

この後、イエスさまは十字架への道を歩まれ、その愛の成就として、十字架で苦しむ道を目指されたのです。ローマ皇帝はじめとする権力者は、すべての人の上に立って、命令を下し、剣によって、人々を足下にひれ伏させて、富を奪います。しかし、イエスさまは、すべての人の身代金として、ご自分の命を、十字架で捧げられました。だから人生での「願い」が、ほんとうの願いと繋がっているか、私たちは主イエスの十字架を見上げて、自らに問わねばならないのです。何が真に幸いに至る道なのか、と。私たちの仕えるあり方、何が望みか、問い続けながらレントの時を過ごしてまいりましょう。